

統十二年、市議會議員

昭和五十二年十一月 全抑協熊本県連合会結成

昭和五十三年四月 全抑協熊本郡市連合会（会員数四

百五十人）を結成。その会長として就任。各校区ご

とに支部を置き、会の運営に多大の貢献をされた。

また熊本県連の副会長として県連のため活動し、め

ざましいものがあつた。

平成元年 全抑協中央会長表彰

平成八年退任に当たり、再度中央会長表彰並びに熊本

県連より感謝状贈呈

（熊本県 高瀬 潤吉）

## シベリア抑留の思い出

熊本県 西崎 通

昭和十八年六月三日、熊本西部十六部隊に召集され、

同月、満州第十八部隊に転属。さらに同年、第十九野

戦自動車廠の特種、技術部隊要員として訓練中、熊本

出身の当時の中隊長が私ども召集兵に対して、「戦争は長期間要する。君たちは年は多いが、しばらく除隊することはない、国家のためと思ひ下士官希望を」と勧められた。

ハルビンの教育隊にて訓練中、「ソ連が満州国に侵入」の情報により当部隊は危急存亡、戦車隊編成、ハルビン市民の警戒体制をとった。一部ソ連兵と交戦状態になり、また満州の地方部隊から狙撃された。我が戦友数人が犠牲になった。その中には同期生も見受けられた。大隊長より営庭に集合との命令により、下士官、将校数百人、暗黙状態でたがずんでいた。

大隊長より天皇陛下の放送のことを言われ、我が日本帝国は降伏した、武装解除だということであらう。ぜんとしていた。ただいまよりソ連軍の指揮下に入るとの命令と同時に、ソ連将兵は、我々の時計及び携帯品をすべて取り上げた。運よく時計だけは渡すことなく無事持ちこたえた。これから牡丹江經由、ウラジオストックから内地帰還と、部隊長の話を信じて反対する人はなく、無蓋車に乗り途中で下車した。山道を行

軍途中、開拓団の一行に出会った。婦女子、先ごろ生まれた幼児、産んだ婦人、老人を左肩に右手に子供の手を引いて、哀れな姿で「兵隊さん、助けて下さい」と頭を下げて拜んでおられた。その姿が何とも哀れであった。我々はひとり身、何とかなるだろうと思ひ、携行していた被服、食料は皆さんに与えて、行軍しながら開拓団の無事帰国を祈って行動した。

横道河子の谷間の道路を通過中、水が欲しいがない。馬の足跡のくぼんだたまり水を、死んでもかまわんと思ひながら飲んだ。数メートル上部に馬が死亡、うじ虫がわいていたその下の水であった。死んでも死にきれず行軍していく。両山上より日本軍かソ連兵か不明だが、砲撃の音が絶えずしていた。

途中、日本兵の上等兵の階級章をつけた軍人の上半身だけの遺体があった。正座したような形で死んでいた。何か手がかりはと思つてポケットを見たところ、貯金通帳の破片が入っていた。残念ながら通帳の記名のところがない。金額数円の記録しか見当たらず、氏名を見出すことができず、そのまま体を横にして、一

同、彼の冥福を祈りながら牡丹江に向かい行軍をし、目的地の收容所に收容された。毎日苦しい生活である。旧軍隊の兵舎の中を回り食糧探しに命をかけた。

また、ときには現地人より銃で撃たれ負傷、死亡した人も数人いた。牡丹江では内地に帰る話、またソ連領に送られる話、いろいろさまざまであった。ソ連に入れば、ソ連は長期間の戦いで物資はほとんどなく、ソ連国民も配給で満足な生活ではない状況、まして我々日本兵に満足な食糧が支給されることはない。何とかして生きようと一生懸命努力した。

戦友の中に、牡丹江より教育隊に来ていた現地召集兵が状況をよく知っていたので、旧軍隊の事務所及び倉庫を回った。地方人が徴発した後を探して歩き、その部隊事務所跡の密室と思われる地下室のすみに、大和糊が十数個見つかった。その付近に、鉄製の物品入れらしい小型の箱がある。金づちで壊し中身を調べたところ、日本製造名入りのクリーム二個、香水一個が出てきた。

これはよい物が手に入ったと同志と話し合い、どう

せソ連に連行されるなら、何とか生命の続く限り生きようと作戦開始、以前に手に入れた大和糊と香水と混合し、運否天賦牡丹江化粧品製造所（自分たちで命名）を設けた。ソ連内で各駅停車時にソ連婦人と物々交換の品物として準備した。時計を取られず牡丹江まで持っていたのを、ハルビンにて食糧補給のため地方人とパン粉二袋と交換した。水で練り固め、焼いて、同志とともに生き延びるため食糧確保をと、必死の思いでやった。

牡丹江は思い出の土地。化粧品製造、パン製造、行き先不明で駅に行き、黒焦げた有蓋車が駅のホームに待っていた。外部から鍵がかけられ、中からはあかない。汽車は一応東に向かい走り出した。そのうちに西に向かい始めた。ソ連領に入り走っていることに気づいた。

長時間走り続け、途中停車するときに小便、大便を、時と場所にに応じて生理的現象を人並みに果たしていた。途中、停車時間は不明である。ときには十分、一時間、または一日中、五日間と停車していく。汽車内での食

糧配給はただ命を保つだけの配給。我々は、牡丹江にいたときソ連内の状況を調べていたので、製造した化粧品を大事に分散して持ち、ソ連領に入ったら物々交換品として準備していた。

前もってつくっていた手製のパンもなくなるし、いよいよ手づくりの化粧品の交換に踏み切った。汽車が駅に着いたら、必ずソ連婦人が警戒の目をくぐって駅で物々交換をしている。我々は言葉が不自由な関係で、一心手づくりの化粧品を見せ、両手につけて顔に塗るまねごとをして、匂いを香らせ「ハラシヨ」と言ってみて、パン、たばこと交換する。汽車が発車するときによい条件であると情報が入っていた。手づくり化粧品を使用されたご婦人の気持ちはどうだったろうか。生き延びるための手段であった。

数日、汽車は走り続けた。広大無辺の大地とはこのことである。シベリアの広野を東より出発して、西へ西へと行く。途中、海が見えたと思って「海だ、海だ」と叫んだ。しかし西へ向かっているのに海があるわけはなかった。朝から夕方まで、丸一日バイカル湖の周

辺を走った。

数十日汽車に乗って駅に着いても、行き先不明を繰り返して、目的地であろうか数回停車している。鉄道左側に収容所らしい建物がある。周囲に鉄条網が張りめぐらされ、高い歩哨の望楼が見えた。ここに我々も収容されるのではなからうかと思っていたとき、下車命令。直ちに下車、人員点呼、丸太づくりの収容所らしきところに入れられた。

丸太づくりの収容所は、人間が生活できるような設備ではない。馬小屋同然で足の踏み場もない状況で、人間としての生活ができそうな状態ではなかった。さっそく次の日より作業編成がなされ、我々は鉄道線路工事作業班となった。

山林開墾に従事させられたが、満足な機具はなく、鋸や斧も十分ではなかった。運搬機具も自分たちでつくり、昔ながらの天秤棒作業である。朝は早く夜は日没までノルマ作業で、生き地獄の状態であった。鉄道作業が進むに従い、機具運搬機も一輪車（ターチカ）も我々日本人がつくり、作業した。冬季は地下二・五

メートルまで大地が凍り、作業は困難だった。当時は満州より黄色火薬をソ連軍が戦利品としてシベリアまで持ってきており、冬期間土地の爆破作業に使用していた。重労働、それに食糧も不足、生きることが困難な状態であり、歩哨の目を盗んで山中に入り、アカザ、タンポポ、アザミ、ワラビ、ヤマウド、柔らかい木の葉、松の皮を取り焼いて、するめと食べて食っていた。

また、蛇などは手当たり次第食糧として腹の中におさめていた。冬季になれば草の芽はなく、ただ配給の食糧のみで栄養失調になり、次から次へと死んでいく状態であった。作業中、体がふらふらでつるはしを振る元気もなく、「ウィストラ」とソ連のコマンジールに追い回されるだけであった。コマンジールの目が離れたときに野草取りに行き、道に迷い帰り道を失い、山の中で行き倒れて死んで行く同志、毒茸を食べて死亡する同志、生き地獄とはこのことと思った。

建設作業中呼び出され、驚いたことに、発電機のポイラー係との作業命令である。さっそく、先輩より指導を受け、何とかできるようになり作業を続けていた。

鉄道建設作業よりはいくらか身体の消耗は違うのであるが、責任は重いと感じながら毎日作業を続けていた。

数日後、ソ連のコマンジールより、「お前たち、日本の妻に手紙を出してよらしい」と通知があった。私はそのとき、捕虜の手紙が日本に届くことがあるだろうか、それは無理な話だと思った。数日後、捕虜用の葉書が配布された。私は信用せず出さずにいたところ、同志の鹿児島市出身の迫正光君が、それでは住所を知らせろ、僕が出してやると言って書いて出した。それが二十三年十月、日本に帰り、妻がその手紙を出して見せたので驚いた。

その後数カ月間、当收容所で働いていたが、突然転属の命令が出た。翌日同志と別れ、第一收容所を後にして次の收容所へ向かった。

数十人の転属者が貨物自動車数台で二十キロ奥の收容所に転送され、車より下車、整列点呼最中、変な日本語で「西崎、ヤポントレホン十年ラポータ、ハラシヨ」と言うので、内地の自分の仕事をソ連人に話したことはないのに、なぜそんなことが知られているか不思議

であった。ソ連コマンジールから、「西崎、エレクトロスタンチ・ラダータ」と指名された。私は何のことかわからないので日本人通訳を通じて尋ねたところ、「あなたが日本で通信関係の仕事をしていたので、発電所と通信関係の仕事をしてくれと言っているのです」とのこと。私は「自分のことを言ったことはないのに、なぜ自分が内地でしていた仕事をソ連がわかるのですか」と尋ねたところ、通訳の方は「それは私にもわかりません」と言われた。当時そんなことがわかるのも日本人のスパイがいたのか、そのことが全くわからない。

その後、技術要員として、ボイラー発電所各工場一般、ソ連人宿舎、関係照明の保安作業を日夜交替でやった。それから二カ月、現地点より一・五キロのところ、小さい工場ができるので、その地点まで送電線及び電話線の架設をするよう私に命令が出た。

冬期間で電柱建設の不能な状態であって、当時は零下四十度ぐらいであった。地下二・五メートルくらいまで凍っている。どうやって電柱を建てますかとソ連

人の責任者に尋ねたところ、「ヤボンスキー、ガラバ、ハラショ」と言うので、通訳に尋ねたところ、「日本人は頭がよいから考えて実施するだろう」ということだった。

そこで私も考えた。送電線を新設する工事の期間は何年ぐらいか尋ねたところ、冬季四カ月ぐらいの臨時工場であり、冬期間持てばよいとのことで、人生最初で最後の仕事、世の中にあまりない電柱建設に取りかかった。地形見当幅二十メートル、距離千五百メートル、伐採（工事要員三千人）電柱は付近の木材を切り倒し、皮を剥ぎ、白樺の木で上の腕木をつくって建設することをソ連責任者に話したところ、さっそく実施命令が出た。いよいよ電柱建設の準備。荷馬車三台、水樽三基用意完了。我々同志、各受け持ちを分担し、電柱づくりをした。運搬作業開始。電柱は定置へ、水運搬係は水汲み作業と共同作業である。さっそく電柱は凍りついた。零下四十度の電柱建設は初めてでもあった。

架線二分鉄筋の短い線を継いで張ってくれとの指示

があり、鉄道のレールを切断した金敷きを使用、たいては鉄線で締めつけ接続した。このときもソ連の物資の不足を強く感じた。架線に取りかかり張線の段階がきた。私はソ連責任者に、どうして線を締めるのかと質問した。ソ連責任者は私に手を合わせた。ソ連にもこんなしぐさがあるのかと思い、話を聞いたら、我々の同志が手を合わせてお願いするしぐさを教えたそう

だ。張線の機具はない。我々は日本人二人を要求した。ソ連責任者は、我ら同志二人を連れてきて私の仕事を見守っていた。内容を話したところ、それは簡単ですぬと言った。そして私の希望通り即席かくらさんを数時間でつくり、丸太樺の中心に穴をあけ、樺を差し込み、付近の松の木に鉄線で輪を二カ所かけ、中間樺を回すことに線が縮まり完全に張線が終わった。喜んだのがソ連責任者、「タワールリッシ西崎、ソルダート三人出せ、幅三十センチぐらいの板一枚ずつ持ってこい」と言ったので、同志三人がソ連責任者のところに何の用かと思ひ通訳とともに炊事場に行った。驚い

たことには、二キロ黒パン十五個とたばこをたくさん「お礼だ、ヤポンスキーソルダートに食わしてくれ」とくれたのだ。我々同志も皆喜んで、久しぶりに腹いっぱい食糧にありついたのである。

数日後、当収容所もダモイの順番がきた。あと三日後に発表されるので、その日を首を長くして待っていた。いよいよ発表だということで、皆、喜んで故郷に思いを走らせ、またシベリアで死亡した戦友のこゝと、思いは人それぞれであった。時を待った。ダモイの発表があった夜は眠れず、夜明かし装具の準備であるが、持ち物は自分の体とソ連の国民服、あとは何もない。ただ生きて帰るのが唯一の喜びであった。

翌日、当収容所前にダモイ者集合、点呼。人員調査中、ソ連コマンジールが私の前に来て、「タワーリッシ西崎、ニエハラシヨ」ということで元の収容所に連れ戻された。内容を日本の通訳を通じて尋ねたところ、ソ連には技術者が不足しているので、もうしばらくソ連に必要だということで、帰国はだめと残留を命じられた。

二度も当収容所で残留組となり、同じく発電所勤務。数日後、またほかの収容所より百二十人が移動してきた。ソ連は我々の団結を非常に注意し、また恐れていた。

発電所の作業班にも二人の同志が編入されてきた。三日後、送水ポンプを回すモーターが故障になった。水なしではできない。ボイラー、工場の設備の機械も停止。怒ったのがソ連コマンジール、「お前が責任者だ、パッサージ」と繰り返し怒るだけである。私も我慢できず、「ハラシヨ、パッサージ」と繰り返し返した。

仕方なく機械を点検し、数時間後修理して機械を活動させた。ソ連責任者は私に、「タワーリッシ西崎、ダモイ・ニエハラシヨ」と言った。そのとき、我々技術者は自分ダモイはできないと同志間で話し合っていた。数日後、急きょ転属になった。行く先は当地より十キロ奥だ。短い期間の当収容所であった。

今度の転属者は技術者少数で、電機関係、大工、機械関係、計八人であった。私は今度で三回目の転属収容所である。前に当収容所にいた同志が帰国したので、

その後の補充要員であった。私は前と同じく発電所勤務、ほかの同志はマアセルスカヤ、職場では同じ作業で、ソ連人の連携プレーの行き届いた指令には驚いた。

今度の発電所には、以前二人のソ連人が勤務していたそうだ。囚人出の地方人であった。昼夜交替で私も二人、ソ連人二人。昼勤務が私どもで、二人仲よく助け合って、帰国のことばかり研究していたところ、突然同志が病気で入院、私一人の勤務になった。当発電所の前方に、我が同志の死体收容小屋が十坪ぐらいの丸太づくりであり、それも私に管理せよとソ連責任者の命令が出た。それは戸締まり及び同志が亡くなったときの戸の開け締めには立ち会うだけだった。ただ、犬が出入りせぬようにとのことだった。

厳しい作業で食物も完全なものは食べさせてもらえず、栄養失調で次から次へと死んでいく。そして、死体室に運ばれ、目は開き、足は曲がった状態で、積み重なった魚の冷凍と同じで、見るも哀れな状態であった。冬期間は埋めることが困難であった。地下二・五メートルの凍土では、焚き火して二時間くらいで十セ

ンチぐらいしか掘れない。死体を埋めるには数日を要する。だから、死体室に收容しておく。いずれ自分もこんな状態になるのではないかと、無念の涙が出るだけであった。

今度こそはダモイの順番が来るだろうと祈りながら作業を続けた。積雪一メートル以上の酷寒のうす暗い朝方、一人のソ連人が長いシュエバ（毛の外套）を着て、何か物入れを左手にさげ、右手にタポール（斧）を持って向こう側の森林の間から出てきた。続いて同じことを繰り返したので、これは何か動物を殺して、山の雪の中に保管しているのではないかと思いい様子うかがっていた。その後、ソ連人と勤務交替。夕方まだ少し明るいころ、向こう側の降雪の足跡をたどって行き、数百メートルのところまで小高い雪を積んだところがあつた。思ったように動物を殺し、肉を保存するための自然冷蔵である。そのときは帰り、次の日の交替後、タポールを用意、物入れ袋も準備して、生命存続のため約五キロぐらいの肉を失敬して持ち帰った。久しぶりに戦利品として、皆喜んで筋肉の補給をした。

幸いに私は通行証が支給されていたので出入りは自由だった。資材不足のため電気の配線も接続不良が多く、電気の故障のためソ連宿舎にたびたび行った。夜でも呼び出されていた。その急用のための通行証支給だ。

三月も過ぎ四月、五月と夏が来て雪解けになったころ、収容所でもダモイの話が出始めた。我々は今度こそ絶対ダモイができるよう心より神にお願いしていた。予想通り、五月末だったと思う。皆、身辺の整理をするよう通訳より指示があった。だれがダモイするか、残留するのか、一日千秋の思いで待っていた。

数日後、「明日、当収容所朝十時出発、白人」と発表があった。私も幸いその一員であった。今度はいかにしてもダモイできると信じ、準備のその夜は眠れず、一晩中、我が祖国、家庭のことが浮かび、心は我が家に帰っていた。

明けて十時、収容所前に帰国者全員整列、点呼。ソ連人三人、通訳二人で名簿対照が始まったところ、一人のソ連人が「タワーリッシ西崎」と叫んだ。手を挙げたところ、「西崎、ハラシヨラポータ、ダモイ・ニエ

ハラシヨ」と、またしてもダモイ停止を命令された。

そのとき私は、気違いになってでも、ソ連人を苦しめてでも帰国したい気持ちであった。本当に捕虜の惨めさをつくづく感じた。第一回もストップ、第二回も同じ、なぜ技術者は帰さぬのかと腹立たしく、独り言を言っていた。何とか策略しないと最後まで帰国できず、このシベリアの広野の露となるのではないだろうか。これでは日本人として恥じると思い、帰国の作戦を考えた。

入ソ後三年も過ぎ、病人弱者はほとんど帰国した。どうせ帰国できないならと、ソ連軍医と知恵比べすることにした。私は小学校六年生のわんぱく盛りで走り回っていたころ、高跳びの練習の際、大きい綱を張って踏んでいたところ過って落ちて片手を脱臼していて、関節が少々食い違いの現象がある。仕事には関係ないが、レントゲンには少し写る。そのことを思い出し、夜の就寝時毛布の中で、同志が気づかぬように関節部分をたたき腫れさせて、作業で自傷して痛いのだと言って、ソ連軍医の診断を受けた。ソ連軍医が「原因を正

直に答える」というので、「先日、工場内で作業中、高いところから落ちて打撲した」と答えると、それでは一時作業を休んでおって、その後レントゲンを撮ってみるということになった。二日後、ソ連軍医が、今から十キロ奥にある病院に行ってレントゲンを撮り、ほかにも六人の患者がいるので同行するとの指示である。私はそのとき、これでダモイが決定するかもと一人で喜んでいた。

病院に到着、さっそくレントゲンを撮った。その結果、軍医はまだ痛むかと尋ねた。痛いと言った。それでは入院だと命令され、ほかの六人も全員入院した。七人の同志は、今度回復したら必ずダモイだと手を取り合って喜んだ。

入院中治療はない。時々レントゲンを撮って状態を見るだけで、治るわけがない。この負傷について同志の通訳が来て、どうしたのかと尋ねた。実は屋内作業中高いところから落ちて腕を折った、こんなに腫れて作業ができない状態ですと、腕をたたいて腫れさせていた。

私はこのとき、同志の通訳に言った。「ソ連の軍医に私が申し上げのことを伝言してください。入ソ後、一度も病氣せず休むことなく、ソ連のために技術者として仕事に頑張ってきた。不幸にして作業中過ってけがをしたので病院に入院、完全に治療して、回復したら再びソ連の復興に努力しますと申し上げてください」。同志の通訳はそのとおり軍医に伝言された。

その数日後、病院患者全員に、私のこと（通訳に言った言葉）が通達された。この病院は民主教育が徹底したところと、先輩の入院者より教えられた。翌朝、一面白いことが生じた。起床時に通達があり、本日九時、病院の前庭に重患以外歩ける者は全員集合と、政治部の幹部より指示があり、約五十人ぐらい集合した。ある政治部の同志が「先日、当収容所（患者病院）に入院した我々の同志が、作業中過って負傷して、ソ連軍医にこのようなことを申し上げた。入ソ以来一日も仕事を休まず、不幸にして作業中けがをして入院、早く治してまたソ連の復興に努力したいと申し立てた。皆さんもこの気持ちで早く病気を治して協力してほしい」

と説明した。私はそのとき残念至極であった。教育された日本人幹部だけあって、こんなことが言えるかなーと思つた。

数日後、私はアクチブの仲間入りを勧められた。マルクス理論については一知半解ではだめだと思ひ、一応一牛懸命やってみた。やはり私の目的が偽装入院で、これがもしソ連及び我れらのアクチブに知れたら大変と、要領よく、仮面が取り外されないよう苦労した。

その後、私は作業部長を命ぜられ病院内の患者の世話指導となつたが、これも突然起きた事態でいたし方がなかつた。突如、当病院にもダモイ者五十人の割り当てが来た。その条件がいろいろあり、「病気が近日中に回復し作業に従事できる人は除き、重患で内地まで輸送中支障が出そうな患者もだめ」との指示である。

皆、今度はダモイできると思ひ、重患の同志は残念がつた。思えば、人間として自由なき人の身の哀れさが身にしてみた。明日帰国者の発表があるとのことで、病院内は右往左往の状態である。同志のアクチブの某氏が、「西崎さん、女医があなたを呼んでこいと連絡

がありました」と言う。さっそく女医の部屋にとんで行つた。「タワールリッシ西崎、ダモイ、ハラシヨ」と握手された。三年数カ月、女の手に触つたことがなかつた。そのときの気持ちは一生の思い出である。

編成は一応完了し、各班帰国者が発表された。啓蒙作業のため各部長は帰国が決定。私は作業部長である。これで三回目の帰国の準備だ。今度は絶対帰る信念、危機一髪、危急存亡、これが実現できなければ私の作戦負けだ。必ず勝つて祖国に帰ると一人でつぶやいた。輸送中の世話役が各部長に決定。私は途中の食糧受領、それぞれの役割が決定した。その夜は何とつか、捕虜の哀れさが身にしてみた。帰国できる同志の喜び、また残留者（重患者）の痩せやつれた姿がいまさらのようになり思ひ浮かぶ。

残留同志より「私たちは生きて帰れない、この私たちが受けた苦しみの償いを、日本国はぜひ実行されるようお願いしていただきたい」と、涙を流して申されたのである。

翌朝十時、収容所（病院）の門前に集合した。見送

りに来た同志はわずか十数人。厳格な取り調べ、そのとき私の記録帳は没収された。古着のソ連服一着だけ。人員確認後、トラックに分乗、収容所を後にした。

私はその時点で喜んだ。第三回のダモイが成功したことは、作戦上の私の勝利だと独り言を言って喜んだ。自動車は約一時間ぐらい走って鉄道沿線に出た。先方の駅のようなところに貨車数両が我々の到着を待っていた。さっそく乗車した。思いを故郷に走らせ、抑留地シベリアを後にした。

#### 【執筆者の紹介】

西崎通さんは、昭和五十二年十一月十三日、私が全抑協熊本県連合会発足式に参加して、八代支部結成の意義を感じて帰って、第一番に相談した大先輩です。私が弟一行君と同年兵であったこと、また同じ抑留者同士ということもあり、親交していました。西崎さんは誠実第一の方で責任感の強い方なので、この方を支部長にお願いして八代支部を結成すれば間違いないと思ひ相談したのです。

西崎さんは電話博士のような方で、在職中、特に農村電話の普及に尽力され、その功績で昭和五十二年四月二十九日、春の叙勲に選ばれ受章の栄光に輝き、名誉ある勲記にその名をとどめられた方でもあります。

支部結成にあたっては、その趣意をどれだけ多くの抑留者に理解してもらえるかから始めました。まず會員の掘り起こしから始めました。年内に各地方に幹事となる人を探し、年が明けたら支部結成をしたいとして頑張りました。県へのパイプは、とりあえず本田が県の理事として連絡をとり、年内に十五人の同志の参加を得たので、一月十五日、支部結成をすることとなり、場所として八代駅近くの萩原会館に予約しました。当日は、県連から上田会長、来賓として鹿児島県連より福里会長、井上事務局長が来代、全抑協設立の趣意について説明してくださいました。おかげで、参加者の中には不信者もあったようですが、当日、百五人の即日入会を得て合計百二十人と、一応支部としての会員数になりました。

支部長に西崎通さん、市部副支部長に新居鶴松さん、

郡部副支部長として田添大和さん、事務局長に本田が選ばれ、事務所を支部長宅に決しました。なお、名称は全抑協の正式名は長いので、通称「八代シベリア会」とし、規約は県連規約に準ずることになり、昭和五十三年一月十五日、八代支部はめでたく発足しました。

一月二十日には、第一号の「八代シベリア会報」を発行し、会員の掘り起こしのため小学校区単位に理事一、二人を置き、入会手続きの便に供しました。また、二人は県連の理事として県連の理事会、九州ブロック大会に出席して会の拡充に努力し、六月九日、第一回の県連総会には多数の会員が出席しました。以来、一にも組織、二にも組織と頑張つて、八月末の県連名簿には二千四百九十五人中、三百三十二人の支部会員を掲載するようになりました。県連事務所も転々とし、県の遺族会館を借りるようになるまで、あちこち二人で行ったものです。そのうちに、中央への署名運動、陳情、請願なども頻繁になり、私は勤務上あまり行けないので西崎さんには無欠席で上京してもらいました。そのたびに出費も多大であったと思います。西崎さん

からは、支部総会などにはいつも「御祝儀」をいただいていたし、上京から帰ったら必ずレポートは正確に作成しておられました。その書類つづり、テープ四百巻と聞いただけでもその誠実さがわかるということです。そのうち県連の副会長もされて、とにかく全抑協の鬼でした。

慰労金申請時には会員も四百三十五人となり、事実上県下第一の大支部となりましたが、彼の人間性に敬服していた会員は、亡くなった方もいますが、現在でも百二十人を下らないのは、西崎さんのご人徳と敬服しています。平成五年度の総会で体調不良で支部長を退かれましたが、支部の最高顧問として、会の守護神として尊敬している次第です。

支部長を退かされるとさっそく、民生委員や町内会長をしておられる。やはり人々は知っていて遊ばせないのですね。

(熊本県 本田 正行)